

論文

戦前期の高島屋百選会の活動

——百選会の成立とその顧問の役割——

山本 真紗子*

◆はじめに

筆者はこれまで美術と美術市場をテーマに調査を続けてきたが、このテーマの研究をすすめる上で、百貨店の美術部が、近代のいわゆる美術界において果たした役割を検討することが必要と考え、近年は百貨店美術部を調査の中心に据えている¹。京阪の百貨店美術部の活動は、百貨店の支配人や美術部の担当者を中心となった人脈・文化的なネットワークを形成し、雑誌等近代特有の道具を用いつつ、新たな美術の流通や消費、文化の創出が進められていくと考えている。また、いわゆる呉服店系百貨店では、着物の新図案創出が事業の柱であり、画家・図案家・美学美術史研究者が力を注いだことから、着物の新図案創出についても調査の範囲を拡大した。三越は、元禄期の着物図案を「元禄模様」としてつくりかえ、文学者たちの言説をつけることで新たな付加価値を生み、自社のPR雑誌の発行や地方にもめぐらせた販売網を利用して、これを“流行”させた。同時代の様々な芸術思潮・新表現もまた、着物の新図案や新柄の創出というフィルタを通して百貨店に“流行”させられるのである。大都市において、戦前の百貨店や企業が同時代の文化や芸術に与えた影響について、近年具体的な検証がすすめられおり²、本稿もまたそうした流れのなかに位置づけられるものである。

さて、本稿では戦前の高島屋百選会の活動にスポットをあてたい。高島屋の百選会については既存文献として『高島屋百選会百回史』（以下・『百回史』、高島屋、1971年）が刊行されている。戦前期については、中井宗太郎が「百選会百回史概観（戦前編）」を執筆しているが、これは中井が自身と百選会の関わりも振り返りつつ、百選会の趣意の変遷を中心に記述したものである。戦中編・戦後編も、中井同様、当時百選会に参加していた人物が執筆しており（戦中編は高島屋京都支店長・百選会幹事であった八木政太郎が、戦後編は龍村織物・龍村謙が執筆を担当）、当事者ならではの“裏話”的な内容や、百選会にかける意気込みのようなものも垣間見られ、この文章自体が百選会研究の重要な資料である。

これらの「概観」は、趣意（書）の内容や創作図案の展開を中心に記述されているため、本稿では『百回史』の記述から百選会という組織の変遷について見ていきたい。百選会には、高島屋社員のほか、出入りの呉服・染織業者、“顧問”とされる学識者・芸術家等が参加するが、彼らがいつごろから、どの程度百選会に関与していたのかは、『百回史』掲載の各自の文章や座談会の記録などから推測するしかない。百選会の各メンバーがどのような役割を果たし、どういった成果を残したのかを検討していく上で、こうした基本的な情報が整理されていない点は不便を感じることが多い。

上記の観点から、本稿では、『百回史』の記述を整理し、百選会の戦前の活動を改めて検討する。戦前期の百選会の歴史を整理することで、今後の研究上の論点を抽出しやすくする。また、百選会顧問の参加時期や参加の事由とともに、顧問の招聘や、百選会活動の活性化に大きな役割を果たしたとされる高島屋社員川勝堅一についても、簡略ではあるがまとめていきたい。すでに筆者は高島屋百選会について、旧稿³で美学者中井宗太郎が百選会の図案創

キーワード：高島屋、百選会、近代、着物、川勝堅一

* 立命館大学非常勤講師

造に果たした役割について論じた。冒頭で指摘した通り、百貨店が学識者や芸術家らを新図案創出事業に組みこむという手法は、三越が先鞭をつけた。高島屋においては、それがどのような形で進められ、またどのような展開がなされようとしていたのか、百選会の成立過程と顧問の顔ぶれを確認することで、考えていきたい。

1. 高島屋百選会とは

まず、高島屋百選会について、その概略を説明しておきたい。

高島屋は、いわゆる呉服店系の百貨店であるが⁴、三越や大丸といった他の呉服店系百貨店に比べると相対的には後発の店であった。明治20(1887)年の御所造営に際し、緞帳や窓掛等の織物の調製を受けたことが高島屋の名をあげ、東京での活動のきっかけとなった。さらに明治29(1896)年には京都飯田たかしまや呉服店大阪出張所を大阪北区堂島中町二丁目に開設、呉服事業の拡大をおし進める。明治30(1897)年には丸亀呉服店の譲渡をうけ心齋橋東入北側に移転、大阪支店として新規開設した。この大阪支店は明治40(1907)年には西洋風二階建陳列式店舗となり、大阪地域での営業拠点となり百貨店として発展する礎を築き、呉服業務の中核拠点としても重要な役割を果たした⁵。また、明治末から海外万博への出品や海外取引のための貿易部の設置をおこなうなど海外展開を早くから志向し、装飾や美術部門の拡大にも力を尽くすなど、他店との差別化を図っている。

しかし、やはり呉服店系百貨店の最重要課題は着物、とりわけその新柄・新図案創出にあった。高島屋も明治期後半からは独自の“図案”の創作をめざすようになる⁶。

明治24(1891)年5月高島屋は初めて帛紗図案の全国懸賞を行った(『高島屋百年史』p57)。その中には、竹内栖鳳、渡邊省亭、都路華香、菊池芳文、望月玉泉等が参加し、岸竹堂、幸野樺嶺、今尾景年等が寄贈画をよせたという。これらの画家のなかには、高島屋貿易部で海外向けの輸出図案を作成していたものもあり、後年高島屋が美術部を展開する際や、海外万博用の大型染織品を作成する折に、非常に重要な役割を果たしたものも多い⁷。さらに、明治37(1904)～39(1906)年のあいだには、経済の好況などを背景に、「ア・ラ・モード」と銘打った新案染織品の公募と陳列会を開催、そこでの多数の応募と展示の好評から、さらに発展させたものが百選会という。

(資料1) 百選会開催前の高島屋の新図案募集関連事業⁸

明治35(1902)年4月 帛紗懸賞図案募集

明治37(1904)年8月 高栄会⁹「色染懸賞会」(審査主任：中澤岩太〔京都高等工芸学校校長〕)

明治38(1905)年6月 「衣裳好み陳列会」

第一回 明治38年6月 京都：京都倶楽部有楽館

第二回 明治38年6月 大阪：大阪博物場

第三回 明治38年11月 東京：日本橋倶楽部

第四回 明治39年4月 神戸：神港倶楽部

第五回 明治39年5月 大阪：大阪博物場

*入場者に投票用紙を配布、「縞、柄、模様、色合より上衣と下着、着物と帯の取合せ等に就き、各人の意向を徴する」(『高島屋百年史』p128)

明治38(1905)年10月 縞・緋図案懸賞募集

明治39(1906)年4月 高栄会主催「花くらべ図案意匠会」(京都岡崎博覧会館、意匠考案：丹羽圭介、審査員：服部音次郎〔主幹〕、井上萬次郎、平塚栄次郎、大八木春暁)

明治39(1906)年9月 「ア・ラ・モード」新案染織品募集

このような新柄・新図案考案の事業を経て、高島屋の新たな図案創造の機関・システムとして設立されたのが、高島屋百選会であった。百選会は、「呉服染織の新たな意匠の創造及び発表の運動に対する機関」(『百回史』序文)として大正2(1913)年3月高島屋京都店に創設された。高島屋の呉服担当者・図案家・学識者ら百選会委員会によ

り作成された「趣意書」「選定色」をもとに、社内や全国の織物産地で図案が作成され、それを審査・選抜、また商品化し、東京・大阪・京都の三都市の顧客を中心に陳列・販売する、というのが基本的な活動である。大正2～12年は毎年春（2月、3月）と秋（9月、まれに10月）、大正13年以降は夏（5～7月）も加わった。戦時中には戦時下の特別措置として昭和16（1941）年から昭和17（1942）年まで「日本服装既正研究会」がいずれも春・夏・秋と計6回開催され、百選会は中断を余儀なくされたが、戦後は平成6（1994）年春まで開催された¹⁰。

さて、百選会の主な活動として、先にあげた着物の新図案の創造があげられるが、それ以外にも、新図案を展示する展示会の開催、PR雑誌や趣意書・標準図案集の発行、新図案創造のための知識を得る講演会の主催などがあげられる。

（資料2）高島屋の発行物

『新衣裳』（月刊）、『百華新聞』、『高島屋宝典』、『読物街』（月刊）、『高島屋ヴォギュー』、『百選会グラフ』、『百選会図録』、『百選会標準図案集』など

当時の百貨店の多くが、自社製品の宣伝広報や通信販売のツールとして、自社独自のPR誌を作成、顧客に配布していた。三越が発刊していた『時好』『みつこしタイムス』などが有名だが、高島屋も数多くのPR誌や図録を発行しており、『百選会グラフ』など百選会向けの媒体もある。これらには百選会開催告知のほか、新作やそれに合う小物など商品の紹介・宣伝、趣意に関連した和歌や詩などの読み物、イメージ・イラストが掲載された。内容の大部分が女性読者（顧客）向けであるのも特徴である。

また、これらとは別に、百選会の趣意書の内容は、関係者や顧客に向けてその回の「流行色」「選定色」に染められた裂が貼付された小冊子にして配布されていた。趣意にあわせて講演会も企画されていたようで、趣意書と同様の配布用小冊子にされた講演の速記録が、高島屋史料館にいくつか残る¹¹。

2 百選会と顧問

戦前の百貨店における着物の新図案創出事業は、単なる新製品の開発ではなかった。同時代の思想や芸術を織り込み作成された趣意書、そこから生み出された“作品”である新図案は、商業上はもとより、店の格や知的レベルといった部分においても、百貨店のまさしく“顔”であり、経営上の重要な“資源”でもあった。このような新図案創出事業の重要性を指摘した代表的な先行研究は、神野由紀による三越を対象とした考察である¹²。神野は、三越は、学識者を集めた「流行」や服飾に関する研究会を持つことや、彼らの寄稿をPR雑誌に掲載することで、単なる読者＝自店の顧客へのサービスというだけでなく、彼らを啓蒙し、“良き趣味”の涵養、“良き趣味”を持つ顧客の育成を図ったとした。また、こうした三越の“良き趣味”を提示した学識者・文化人たちが、一つの文化的なネットワークを形成していたことを、山口昌男が指摘している¹³。

さて、高島屋の場合はどうだったか。すでに何度も指摘するように、百選会においても、中井宗太郎をはじめとする学識者のほか、画家や文学者らが顧問として名を連ねていた。しかしその詳細は、本稿冒頭で指摘した通り『百回史』の記述が未整理な部分が多い。

『百回史』序文によると、明治末にはじまった新柄募集「ア・ラ・モード」時代を経て、さらに図案の改良・発展を進めんとした当時の高島屋呉服店店長飯田政之助は、各幹部店員に諮り、店主飯田新七と「丹羽圭介・神坂雪佳 両顧問」に意見をうかがい、百選会を構想、創設したとする。丹羽は京都の殖産興業政策の第一線で活躍してきた人物であり染織事業にも深くかかわった人物である¹⁴。また神坂も、当時の図案研究・考案・指導の第一人者であった¹⁵。両者は百選会の顧問という形では紹介されないが、高島屋というよりむしろ飯田家の顧問として高島屋の図案制作に長く助言を与えていたようだ。神坂はのち百選会の第一科（国粋）を主に担当し（ちなみに百選会の賞状デザインは神坂の手によるものらしい¹⁶）、丹羽は海外博覧会にかかわっていたことからパリ・モードを持ち込んだという¹⁷。

丹羽、神坂以外に百選会の「顧問」格として助言をあたえた人物に「沢村先生」がいる。「沢村先生」とは京都帝国大学助教授沢村専太郎¹⁸を指すと思われる。沢村が大正12(1923)年に洋行したため、菅原教造や中井宗太郎を招聘したようだ¹⁹。

さて、百選会顧問として、菅原教造、中井宗太郎、和田三造、堀口大學、与謝野晶子の5名があげられる。京阪域にゆかりのある人物が中心だが、当時は京都・大阪店(飯田家)が高島屋の中心であること、百選会に参加する着物・染織業者の多くが京都にあることによるとと思われる。ただし、趣意の決定には三都(東京・大阪・京都)各店の代表者が参加し、開催も三都もちまわりであったということだ(『百回史』p9)。

『百回史』巻末に収録された年表「百選会百回のあゆみ」²⁰には、大正5(1916)年1月の欄に次のようにある。

百選会出品について講演会を催す(趣意発表会の^(ママ)初まり)その後毎回左記の諸先生を講師として招聘(^(ママ)へい)する
 顧問 菅原教造 中井宗太郎 和田三造 堀口大學 与謝野晶子
 講師 本野 享 村上宇一 武田五一 菅原教造 中井宗太郎 小山内薫
 須田国太郎 太田喜二郎 野上俊雄 山本美越乃 足立源一郎
 竹内逸三 浜田耕作 沢村専太郎 与謝野寛²¹ 和田三造
 清水 光 エドガース 堀口大學 黒正 巖

(*人名表記は原文のママ。紙面の都合上、改行の位置を若干変更した)

この記述に基づき、筆者は旧稿では、大正5年(1916)年1月に趣意書発表会が開始したことをうけ、菅原教造らの5名が顧問として招聘されたとした。しかし、『百回史』に収録されたそれぞれの文章やコメントによると、自身が関与した時期として、大正5年以降の時期をあげている人物もいる。そのため、各顧問の参加時期や経緯を明らかにするため、『百回史』のなかから該当する部分を確認していきたい。

◆菅原教造²²

菅原が『百回史』に寄せた「百選会二十年物語」(pp179~180)によると、高島屋との関係は(寄稿当時)二十年であったという。同書内では触れられていないが、元々三越の図案作成にも菅原は関与しており²³、当時の学識者のなかでは着物・図案や色彩研究の第一人者の一人として非常に重要な人物であったと思われる。

私は明治四十年に、心理学科の卒業論文に色彩研究を書いた因縁から、当時百号で休刊になった「歌舞伎」という劇の雑誌の、たしか最終号に、忠臣蔵の十二段を通して衣装の色を調査して、服飾の芸術的研究を書いたことがある。(中略)この明治四十年ごろが、私に服飾の芸術的研究の目を開かせた最初の機会である。

そのうちに第二の機会がやって来た。大きい黒土蔵造りの高島屋東京支店が京橋に現れたのが大正五年、私が高島屋図案部で色彩心理の実験講話をしたのが大正九年のことである。その時はじめて川勝さん(*引用者注:川勝堅一)に会った。これが二人の因縁のはじまりである。(中略)

大正九年から戦時までの二十年の間に、百選会の問題を考えていた二人の年は、川勝さんは三十から五十までの二十年、私は四十から六十までの二十年である。

(*「百選会二十年物語」より)

しかし、『百回史』「先覚と功労者」(p151)の記述によると、第一次大戦後の世界情勢に関し、朝日新聞社の講演会でポスターの重要性を説いたことが奇縁となり、当時の高島屋東京宣伝部長川勝堅一との交友がはじまった。その後染織の図案や色彩に関して意見交換をするうち、百選会や趣意書に関しても意見を寄せるようになりついには顧問に推されたという。いずれにせよ、菅原が百選会に参加するきっかけをつくったのは、社員であった川勝の存在が大きいということである。

◆中井宗太郎²⁴

「大体私が百選会に参加するに至ったのは大正十三年以後でして、私の百選会に対する考えは、「百選会は国家的事業である」（*引用者注：下線部分原文傍点あり）というんです。」²⁵とあるように、中井は大正13（1924）年から百選会に関与したようである。

大正12（1923）年より百選会は第一科・第二科の二科制を採用、大正13年からは、それまでの春秋2回に夏の百選会を加え、年3回の実施となった。百選会のシステムを変更しさらに発展をとげんとしていた時期に、中井が招聘されたとも考えられる。大正8（1919）年京都絵画専門学校教授に就任した中井は、大正11（1922）年から翌12年にかけてのヨーロッパ留学から帰国したところである。また、大正13年は関東大震災後の復興と希望をこめ、第一科では桃山時代の服飾にヒントを得た「新興花鳥模様」を打ち出した。百選会に桃山時代を範とした趣意が多く採用されており、その背景には中井の影響が少なからずあったことは筆者が旧稿で指摘した通りである。百選会で（第一科の）テーマが決まると、中井を先頭に各寺院や神社を見学に見て回り、勉強してまわったというが²⁶、中井や菅原の打ち出す趣意書は、現場の図案作成者にとってはしばしば難解であったようだ²⁷。

◆和田三造²⁸

和田三造「色彩五十年」（『百回史』pp172～173）によると、そもそも高島屋との交際がはじまったのは、留学からの帰国（大正4・1915年）後、京都の高島屋の展覧会に作品が出品されたことがきっかけであったという。飯田家の人々の相談を受けるようになり、近所に住していたこともあって親しく交際していたという。百選会に本格的に関与した時期はあきらかにされていないものの、大正9（1920）年9月高島屋の後援で染色芸術研究所を設立していることなどから、少なくとも高島屋との関係は大正期にかなり深まっており、このころに顧問についたのではないかと考えられる。研究所は高島屋の社員からは「赤坂研究所」と呼ばれていたようで、当時高島屋東京店にいた山県（形）は和田三造の“一派”と目されていたようだ²⁹。

◆堀口大学（1892～1981）

『百回史』にはエッセイ「百回目に思う」の他「百回目に歌う」（巻頭詩）、「近代詩風模様見立（組詩）」、「五十回目に歌う（詩）」が収録されている。堀口は與謝野晶子から和歌をならっていたということから、與謝野夫婦を介して高島屋、ひいては百選会に参加するようになったようだ。本人の弁では昭和3（1928）年から参加するようになったという。堀口の参加が契機になったものか、元々そうしたテーマをとりあげたいがため堀口を招いたのかはわからないが、翌昭和4（1929）年には「近代詩風模様」が採択され、趣意書もこの年から参加したという³⁰。

余談ではあるが、高島屋は海外の中でも早くからフランスと関係が深く、最初に海外に設立した支店はリヨンであった（のちロンドンに移転）。新図案の募集に関して、百選会の前は「ア・ラ・モード」と名付けているし、模様名にも「新クロマ（色調）模様」「ボン・トン（いい調子）模様」「ラ・ヴィ（新生）模様」「ウルチマ・モウダ（流行の極致）」といったフランス語を用いたものが目立つ。第54回春の流行百選会（昭和10・1935年）の趣意発表会（京都市公会堂）で、堀口は「流行に就て」と題した講演会を行っているのだが、そこでの講師紹介に「何かといひますと先生のもとへ参りまして最近の海外のこと、特にパリ方面のことなど色々な方面のニユースを伺ひ、又御意見を伺ひますのでそれがため百選会は益々活かされてをるのでありまして、誠に感謝に堪へない次第であります。」（講演会速記）とあることから、堀口には詩の作成のほか、フランスのモードの紹介といった役割が期待されていたものと思われる。

◆與謝野晶子（1878～1942）

『百回史』「先覚と功労者」（p151）によると、百選会の初期（大正7～8年）の流行色の発表にあたり、色彩の名付をおこなったことが百選会との関係の始まりであるとする。大正8（1919）年第13回春、初めてファッション・カラー（選定色）を発表、その色名を與謝野晶子が「平和色」と命名したことを指すのであろう。その後も、色名の名付けは昭和15（1940）年秋（68回）まで続き、その他にも製品の名付けや、百選会製品の絵模様・色調や入選作をモチーフにした作歌（「きもの讃歌」大正10年春～昭和15年夏）をおこなった。それらの歌は展覧会場、案内状、

百選会グラフ等に掲載されている。また、夫寛も「問道への招引」(詩)、『百回史』p217)を發表するなど、晶子ほどではないが関与している。

堀口大學や與謝野夫妻の他にも百選会は、吉井勇や竹中郁といった詩人・歌人をメンバーに加えている。百選会の選定色の名称の考案を歌人に任せることで、従来の色との違いを強調し、より豊かなイメージを喚起する効果を期待していたのだろう。百選会のテーマや色名を織り込んだりモチーフにした作品も、百選会の製品や会そのもののイメージの広がりや格上げといった効果を期待された面があったのではないか。このほか、北原白秋、谷崎潤一郎、佐藤春夫、西条八十らが着物の詩や和歌をつくっていたという³¹。

以上、5名の顧問の高島屋との関係や参加の時期について、『百回史』の記述をまとめた。このなかで川勝堅一という人物が何度か登場している。次項では彼の役割について考えてみたい。

ちなみに、上記以外にも、百選会ではいわゆる文化人を積極的に広報に利用している。例えば、大正14(1925)年第26回秋の東京特別会場(星ヶ岡茶寮)の展示では、著名な文化人を招き作品の批評会を開催したという。来場者の集合写真³²と展示作品に関するコメントが後日発刊された『秋の百選会グラフ』に掲載された(「知名の芸術家諸氏を批判して 百選会作品の批評会」「諸先生の御批評」)。

3 川勝堅一と百選会

川勝堅一(1892～1979)は、東京高島屋で宣伝部長として頭角をあらわし、その後高島屋の広報宣伝活動、図案創出活動、美術関連事業に大きな働きがあったとされる人物である。まずその略歴を、戦前を中心に確認し、百選会との関わりをみていくこととする³³。

明治25(1892)年京都府亀岡市に生まれた川勝は、明治40(1907)年高等小学校卒業後、師範学校をめざすも病気のため断念し、高島屋(飯田呉服店)に入店。住み込みのいわゆる“小僧”としてのスタートであった。

明治41(1908)年春に高島屋に“入社”した翌年の秋、京都高島屋新築記念の催しとしておこなわれた「現代名家百幅画会」は川勝を夢中にさせた。この展覧会は、百貨店で開催された最初期の展覧会である。当時、一階の京友禅売場に配属されていた川勝は、展覧会が見たいがために無断で職場を抜け出しては盗み見ていたため、上長にとがめられたという。

大正5(1916)年12月1日の高島屋の東京支店開設にあたり、支店長村松善次郎の片腕として東京に赴任する(「東京初のぼり」『日本橋の奇蹟』所収)。26歳で手代、大正10(1921)年に上役となり、大正12(1923)年には宣伝部長となった、のちに図案部長も兼ねている。この宣伝部長時代に考案したキャッチ・コピーに「皆様の高島屋」があるという。東京支店所属時には関東大震災にも遭遇しており、震災直後の物資の調達に奮闘、営業中を知らしめるためさまざまな知恵を絞るとともに、宣伝活動の重要性を痛感したという(「大震災火災禍中のデパート」『日本橋の奇蹟』所収)。

その後大阪長堀橋支店に移動。また社命により大正15(1926)年には十か月間欧米視察に派遣されている(「お足の図」「スーツケースの切腹」「十か月間に三百回洋行した話」『日本橋の奇蹟』収録など)。大阪に移ってから行った「日光博覧会」(昭和2・1926年10月29日～11月20日)は大変な評判をとったようだが、この成功もまた川勝に催し物や宣伝の力を強く印象付けたという(川勝堅一「『日光博』の憶ひ出」『大阪高島屋四十年史』昭和12・1937年)。その後大阪支配人代理兼宣伝部長となり、南海高島屋(現・高島屋大阪店)が開業すると、長堀橋と両方の支配人となった。昭和17(1942)年3月には常務取締役役に就任する。

川勝は文章を書くことは好きだったようで、百貨店論や接客等のサービス論といったビジネスに関する随筆³⁴はもとより、与謝野晶子の手ほどきをうけたという和歌が自著や経済誌などに掲載された³⁵ほか、交流のあった画家や文学者に関する寄稿もしばしば行っている。

川勝は、職務上さまざまな人物との交際があったが、その付き合いのなかから、美術品のコレクションもおこなっている。一般によく知られているのが河井寛次郎作品のそれであろう。川勝は河井寛次郎がまだ無名の陶工であったころから彼の才能を愛し、また彼と彼の作品を世に出すことにつくした。大正10(1921)年、河井が第一回創作

陶磁展を東京と大阪の高島屋で開催した際、宣伝部にいた川勝と意気投合し、その後の作品発表はほぼ毎年高島屋で行った。川勝はのち自身の所有する河井作品のうち厳選した四百点余を京都国立近代美術館に寄贈しており、現在も常設展示等で目にすることができる³⁶。このほか、和田三造、棟方志功、泥谷文景などの書画、岩田藤七のガラス作品、画家岡田三郎助の遺愛品を含む時代裂・時代染色品、ペルシャを中心とした東方緞通（カーペット）などを収集した³⁷。これらは、終戦後かまえた自宅「赤楽窓」の美術・工芸品の陳列場兼談話室に飾られ、主人と家族の生活を楽しませたという³⁸。

さて、川勝と百選会とのかかわりだが、大正7年か8年に川勝が図案部部長を兼任後（『百回史』p172）、図案部も百選会に力を入れるようになったという。「僕は川勝さんがいなかったら（*引用者注：百選会の斬新な図案は）なかなかできなかったと思う。やっぱり川勝さんというのは神さんみたいな……。笑）」³⁹といった発言もできるほど、川勝の意欲や彼自身のキャラクターが、百選会事業の進展に大きな役割を果たしていたようだ。川勝自身の百選会や着物に対する考え、もしくは思い入れや期待、自負といったものは、川勝自身が書いた随筆内にしばしば見出される⁴⁰が、今回は『百回史』の記述を中心とした、周囲から見た川勝評を手掛かりに、百選会との関わりを見ていく。

川勝の人物評でしばしば出てくるのが、その積極性である。川勝の積極性や周囲をまきこむ力を示すエピソードとして、中井宗太郎があげた、東京での趣意に関する会議の際のエピソードがある。話し合いをするうちに、参加者の一人が、つきつめると自然をいかに見るかが重要であり、我々も自然の大気を思う存分呼吸する必要があるのではないかと、と言うと、川勝がすかさず「すぐ今からどうです」と皆にきいてまわった、会議に参加していた17名はそのまま車で芦ノ湖に向い、富士山を背景に写真を撮り、その晩熱海で一泊することとなり一同大喜びであったという。（『百回史』pp33～34）例えば菅原教造を百選会顧問に推したように⁴¹、様々な人と頻繁に意見を交換し、そこから人脈を広げ協力者をつくるのが非常にうまかったようだ⁴²。

百選会の図案作成においても、自ら図案のアイデアを出し、図案を描くこともしながら励んだ⁴³。ときには斬新すぎると思われるような図案が川勝から提示されたようであるが、そのようなものであっても、何度も試作をかさねることで、実現していったという⁴⁴。

川勝一人が百選会を牽引した、というものではないようだが、彼の存在は、当時の高島屋の図案作成にとって、メンバーの意欲や新しいアイデアを引き出すという点で、また百選会を中心にさまざまな人脈をつなげるという点で、非常に大きかったと考えられる。

◆おわりに

本稿では、主に『百回史』内に記された内容を、百選会顧問と川勝堅一に絞って整理した。百選会開始前や開始直後の状況についての記述を整理した結果、趣意書作成の組織は初めから確立していたものではなく、明治30年代後半からの積み重ねや、さまざまな形での学識者の招聘を経ることで、百選会の顧問が確定され、趣意や図案作成のプロセスが作り上げられていったことがわかった。しかし、いまだ『百回史』の記述だけでは明らかにならない点も数多く見受けられるため、今後も不明点を確認する作業は継続する。各顧問が百選会に与えた影響については趣意書を中心に今後も検討を続けなければならないし、とくに川勝堅一の人脈や仕事は、百選会の活動だけでなく、高島屋美術部との関わりも含めて検討していく必要がある。高島屋の美術関連事業と着物（図案創出）事業との関連性を具体的に考察するためにも、今後も川勝の活動を中心とした調査をおこないたい。

*本稿の執筆にあたり、高島屋史料館および表田治郎氏より資料の提供をはじめご協力、ご教示をいただいた。末尾ではあるは謝意を表す。また、本論文の調査の一部に文化学園大学文化ファッション研究機構服飾文化共同研究拠点共同研究（共同研究：22007）による研究助成を受けた。

注

- 1 山本真紗子「阪急百貨店美術部と新たな美術愛好者層の開拓」『Core Ethics』（立命館大学大学院先端総合学術研究科）Vol.6、2010年。同「戦前の阪急百貨店美術部の活動—民芸との関わりを中心に—」『同志社大学社会・芸術国際センター年報』2、2010年。同「北村鈴業と三越百貨店大阪支店美術部の初期の活動」『Core Ethics』Vol.7、2011年。同「百貨店の図案創出における日本美術研究成果の影響—中井宗太郎と高島屋百選会の事例から—」『Core Ethics』Vol.8、2012年。
- 2 神野由紀『趣味の誕生 百貨店がつくったテイスト』勁草書房、1994年。山口昌男「明治モダニズム—文化装置としての百貨店の発生（一）」・「近代におけるカルチャーセンターの祖型—文化装置としての百貨店の発生（二）」『「敗者」の精神史』岩波書店、1995年。瀬崎圭二『流行と虚栄の生成 消費文化を映す日本近代文学』世界思想社、2008年。和田博文『資生堂という文化装置 1872～1945』岩波書店、2011年。また、本稿執筆後となるが、三越の文化事業をとりあげた第85回 歴博フォーラム「『江戸』の発見と商品化—大正期の三越の流行創出と受容」（2012年9月15日開催）がある。
- 3 既出・山本真紗子2012。
- 4 高島屋の歴史については、高島屋の社史や百貨店業界史のほか、下記に詳しい。
藤岡里圭「高島屋草創期における博覧会の役割—呉服店の近代化をめざして—」『経営研究』50-1/2、1999年。藤岡里圭「高島屋における百貨店化の過程」『経営研究』51-1、2000年。藤岡里圭「百貨店による顧客の開拓と流行の創造」『経営研究』56-4、2006年。
- 5 末田智樹「『高島屋百年史』に隠された高島屋経営発展の基盤」『高島屋百年史』（社史で見る日本経済史41）ゆまに書房、2009年（大江善三編輯兼発行『高島屋百年史』高島屋本店、1941年の復刊）p7～10。
- 6 高島屋の図案創出や図案の変遷・展開に関しては下記の先行研究がある。
藤本恵子「近代染色図案の一考察—高島屋資料館所蔵友禅裂地から—」『朱雀』6号、1993年。馬場 まみ「近代京都における染織産業と高島屋百選会」『生活文化史』（43）、2003年。青木美保子「大正・昭和初期の服飾における流行の創出—高島屋百選会を中心に—」『デザイン理論』44、2004年。青木美保子「近代日本におけるファッション産業の諸相—大正・昭和初期の百貨店の着物図案をめぐる—」京都市芸繊維大学博士学位論文・2007年3月。青木美保子「大正・昭和初期の着物図案に見られるヨーロッパの芸術思潮の影響」『神戸ファッション造形大学神戸ファッション造形大学短期大学部研究紀要』33、2009年。
- 7 廣田孝「明治期後半から大正初期の高島屋における竹内栖鳳の立場」『デザイン理論』44、2004年。同「飯田呉服店（高島屋）の『現代名家百幅畫會』（明治42年）について」『デザイン理論』46、2005年。同「明治期の百貨店主催の美術展覧会について—三越と高島屋を比較して—」『デザイン理論』48、2006年。同「高島屋『貿易部』美術染織作品の記録写真集」（京都女子大学研究叢刊47）、京都女子大学、2009年。ほか。
- 8 『高島屋百年史』ゆまに書房復刊版、2009年、pp.124～131。
- 9 飯田呉服店（当時）の専属の図案家、染織悉皆業者、取引先・職先の有志らが、「共存共栄互いに租製乱造の弊をとり除き、互いに技術の錬磨によってその道の発達を計り、後身徒弟をも養成する目的」で集った団体。他に高盛会・高隆会（裁縫業者）といった会が当時存在したという。『百回史』p3。
- 10 百選会の開催時期や顧問の参加時期に関して、旧稿の記述に関し、表田治郎氏よりいくつか指摘をいただいたほか、資料の提供を受けた。本稿で検証・訂正していきたい。
- 11 『第五十四回百選会趣意発表会堀口大学先生講演速記』、『服飾と音楽 菅原教造』、『聚楽物語』（中井宗太郎）、『中井宗太郎先生述 文化の発展と生生花鳥』など。
- 12 既出・神野由紀1994。
- 13 既出・山口昌男1995。
- 14 明治5（1872）年京都府立英学校入学、さらに府立農牧講習所などで西洋技術の習得につとめる。明治7（1874）年慶応義塾京都分校に学ぶも半年足らずで閉鎖。明治12（1879）年に京都府会が開設されると府会の書記長となり、明治15（1882）年には勸業政策担当の御用掛に就任、京都博覧会ほか博覧会事業に関係し、京都・日本からの出品の陣頭指揮をとった。のち藍綬褒章を受ける。飯田新七はじめ飯田家との親交が深く、協力を惜しまず、晩年は新七宅に「飯田の番頭かといわれたほど」足しげく訪ねたという。小林丈広『明治維新と京都 公家社会の解体』臨川書店、1998、pp109～111。『百回史』p152。
- 15 1866年～1942年。四条派の日本画家・鈴木瑞彦、図案家・岸光景に師事する。京都市立工芸図案調製所主任を務め、京都市立美術工芸学校で教鞭をとる。明治34（1901）年英国グラスゴー万博視察後は、工芸関連の展覧会の審査員や皇室関係の室内装飾・工芸図案を多数担当。遊陶園、京漆園、佳美会（のち佳都美会）や光悦会等の活動に参加し、図案制作とその研究・発展に力を尽くした。また琳派研究でも有名。著書に『蝶千種』『海路』『百々世草』など。
- 16 『百回史』p191には神坂制作の百選会優選賞状の写真が掲載されている。
- 17 『百回史』p177。
- 18 1884年～1930年。美術史学者・詩人。京都帝国大学文科大学哲学科にて美学美術史を専攻する。卒業後雑誌『国華』の編集に従事、

- 同時に東京帝国大学大学院に在籍し瀧精一のもとで近世美術史を学ぶ。大正8(1919)年京都帝国大学の助教授として着任、大正12(1923)年には在外研究員として中国・ヨーロッパ・アメリカで調査をおこなった。昭和5(1930)年教授に任ぜられると同時に死去。死後、弟子により『東洋美術史の研究』『日本絵画史の研究』が編集刊行された。神林恒道編『京の美学者たち』晃洋書房、2006年、pp.40～42。
- 19 『百回史』p182。
- 20 『高島屋百年史』(1941年、ゆまに書房復刊版2009年p211)にも同様の内容があるため、同書からの転載と考えられる。
- 21 一般に「鉄幹(鐵幹)」の雅号で知られるが、これは明治26(1883)年から明治38(1905)年に使用し、以後本名の寛を用いている(『日本近代文学大事典』講談社、1984年より)。「百回史」内の表記は寛・鉄幹ともに(時に年記に関わりなく)使用されているため、「百回史」原文の表記を優先させる。
- 22 1881年～1967年。心理学者、(服飾)美学者。明治40(1907)年東京帝国大学文科大学哲学科心理学科卒業。同大学文学部美学教室副手などを経て、大正9(1920)年より東京女子高等師範学校(現お茶の水女子大学)教授、同年高島屋百選会顧問に就任。心理学・美術史・服飾学専攻。著書に『服飾文化論』文化服装学院、1964年。『服装概説—菅原教造先生遺稿集』近藤出版社、1989年など。なお、第39回昭和5年秋の趣意書には菅原による「図案から製品へ」という論考が掲載されている。
- 23 明治42(1909)年4月菅原は流行会(第二期)に迎えられたという。既出・神野1994、p143。
- 24 中井の経歴に関しては既出・拙稿2012および中井あい『桃水流水』(私家版)1967年。中井宗太郎(中井あい)『日本絵画論』文彩社、1976年。田野葉月「中井宗太郎と国画創作協会」神林恒道編『京の美学者たち』晃洋書房、2006年。田野葉月「京都画壇と中井宗太郎—その理念と実践—」(立命館大学2008年度提出博士論文)を参照のこと。
- 25 龍村謙「百選会百回史概観(戦後編)」『百回史』p75。*京都高島屋機関誌『敬和』(昭和23年3月30日発行)掲載座談会「百選会を語る」よりの引用部分。
- 26 『百回史』p9、p186。
- 27 「菅原教造先生や中井宗太郎先生が、次のテーマを考えて原案を持ってこられる。初めなんのことだかさっぱりわからない。話を聞いたり、参考書を集めてどうやらつかめてくるんですね。ですから、むしろ上層部の方はそういうものを先に決めてしまう。これはまた勇気があるんですが、とんでもないものを持ってこられる。絵巻物でもただ絵として見てはいけない。その中から捜せといわれるでしょう。さあ、えらいことなんですよ。」「中井先生の生々調というのはあの先生の芸術思想ですよ。生々発展は形でつかまえないければいかん。まるで福田平八郎さんを教育するみたいな格好で図案を……。」座談会「東で……」内での向井潤吉の発言。『百回史』p174。
- 28 和田三造(1883～1967)。洋画家・色彩研究者。明治40(1907)年の第一回文部省美術展覧会にて若干24歳ながら《南風》で最高賞を受賞。明治42(1909)年渡欧。インドなどもまわったのち大正4(1915)年に帰国。帰国後は日本画にも打ち込む。その活動は幅広く壁画のような大作の製作はじめ、映画美術・装飾・工芸に関わるプロジェクトや役職も多数こなした。大正9(1920)年、高島屋の後援で染色芸術研究所を設置して製作・指導にあたっている。昭和2(1927)年、帝国美術院会員。同年、日本標準色協会(のち日本色彩研究所に改称)を創立。昭和7(1932)年東京美術学校図案科教授就任。昭和12(1937)年パリ万博では専門委員として工芸品の斡旋・指導を行う。著書に『欧米絵の旅』(章華社、1935年)『色名総鑑』(春秋社、1931年)などのほか『創作図案集』(国民図書、1926年)『最新図案教程』(総合美術研究所出版部、1936年)など図案関係のものが多数ある。なお、高島屋では和田三造油絵展(長堀高島屋、昭和7・1932年11月)などの個展も開催している。『和田三造展』図録、姫路市立美術館、2009年。
- 29 『百回史』p182。
- 30 『百回史』p177。
- 31 「麗粧(あですがた)・百選会・三世相—カラー・テレビにかけてみたい—」川勝堅一『日本橋の奇蹟』実業之日本社、1957年所収。
- 32 集合写真につけられた解説にあげられた人名は次の通り。表記原文ママ。菊池寛、岡田三郎助、石井柏亭、安井曾太郎、藤島武二、堀口大学、松岡映丘、菅原教造(*百選会顧問)、笹川臨風、山下新太郎、與謝野鉄幹、與謝野晶子(*百選会顧問)、岡田八千代、関口冬子、中井宗太郎(*百選会顧問)、小山内薫、田中良、野部愿夫など。
- 33 川勝堅一の経歴に関しては「本邦デパート界の新鋭 高島屋の川勝堅一」『興亜財界新人譜』投資経済出版部、1939年。川勝堅一『日本橋の奇蹟 デパート随筆』実業之日本社、1957年。を主に参照した。
- 34 既出・『日本橋の奇蹟』、川勝堅一『サービス』ダイヤモンド社、1959年ほか。
- 35 川勝堅一「空腹の快感」『日本経済新報』35(7)1951年。同「りんご」雑詠『経済人』7(4)(6)、1953年。同「空腹」のよここびを語る」『chamner』75、1956年。など。
- 36 河井須也子「父の無二の賢友、川勝堅一様」『不忘の記 父、河井寛次郎と縁の人々』青幻舎、2009年。京都国立近代美術館 編集『陶工河井寛次郎展 川勝コレクション』京都国立近代美術館 1968年。京都国立近代美術館 編『河井寛次郎作品集 京都国立近代美術館所蔵川勝コレクション』東方出版、2005年。
- 37 川勝堅一『川勝コレクション特選集』平凡社、1971年。川勝堅一『川勝亦楽窓 画信雁信抄』平凡社、1971年。
- 38 川勝堅一「夢のような住い」『暮らしの手帖』昭和29年(1)23号、1953年。「夢のような住い」『日本橋の奇蹟』収録。
- 39 「東で……」(座談会)高岡徳太郎(一陽会々員)の発言。『百回史』p178。

- 40 川勝堅一「流行私見と百選会の事ども」『文様』1925年11月号。同「世界の華・キモノ百選会」『百回史』pp166、「キモノを語る」『日本橋の奇蹟』所収など。
- 41 「それまで私は、心理学や美学の窓から着物をのぞいて見て考えていただけであった。川勝さんと知り合ってから、人を美しく生かす季節季節の着物を作ることを考えるようになった。そしてこの考え方が、百選会の製品によって実現されるようになったのである。」菅原教造「百選会二十年物語」『百回史』pp179～180。
- 42 「京都帝国大学の野本教授が「川勝氏はほんとうに高島屋の人か」と聞かれたことがある。それもそのはず昔彼はしるし袴纏姿で車をひいていたのだから。彼はどんなことでも平気でやってのけ、かつ実に勉強もした。新橋あたりで「川勝さんのためならなんでも……」という女も現れた。彼（*引用者注：川勝堅一）が宣伝部長になる前、ながいはかまをはいて、いろいろと相談をもちかけてきた姿が今でもほうふつとして目に浮かぶようだ。」和田三造「色彩五十年」『百回史』pp172～173。
- 43 高岡「その私が川勝さんにおだてられたことがあった。宣伝部でパリッとしたのをかいて図案部を驚かせということで、川勝さんも自らかいたんですよ」
—川勝さんがおかきになったのは昭和に入ってからですね。
高岡「夜やりましたね。川勝さんと。」
川勝「入選したら等分に分けてね。」（*引用者注：賞金を指すと思われる）
高岡「川勝さんが金箔（ばく）を持ってきたり、いろんな原料を持ってきてね。」
以上『百回史』p176より引用。
- 44 田中「やはり川勝さんがエナメルを流されたとかいう、夢みたいな趣意にかなった標準図案を作るために、それらしいものができる、それを「図案の神様」とかいう名前をつけてね。（笑い）それにヒントを得てやったように思います」
森川「まず神様をひとつこしらえたわけです。それから試作、また試作です。」
以上『百回史』p184より引用。

Outline of Takashiyama Hyakusenkai Activities in the First Two Decades of the 20th Century

YAMAMOTO Masako

Abstract:

The purpose of this study is to outline the activities, in the first two decades of the 20th century, of Takashiyama Hyakusenkai, Takashimaya Department Store's design committee, which was responsible for conceptualizing new designs and principles for the season's kimonos. After clarifying Hyakusenkai's history, based on *Hyakusenkai Hyakkai-shi* [Commemorative History of Hyakusenkai on its 100th Exhibition], the study examines more closely the active promotion, starting at the turn of the century, of the creation of new kimono designs by Takashimaya and the role performed, during the same period, of five Hyakusenkai advisers: an aesthetician, an art historian, an artist, and two poets. In addition, this study focuses on Kenichi Kawakatsu, an employee of Takashimaya who assumed leadership of Hyakusenkai activities. The paper traces briefly Kawakatsu's personal history, and shows his role in managing and leading the activities of the Hyakusenkai department. This research shows that Kawakatsu and the advisers of Hyakusenkai had close personal and professional relationships and that they strongly influenced the creation of new kimono designs by Takashimaya.

Keywords: Takashimaya, Hyakusenkai, kimono, modern, Kenichi Kawakatsu

戦前期の高島屋百選会の活動 ——百選会の成立とその顧問の役割——

山本 真紗子

要旨：

本稿では戦前の高島屋百選会の活動にスポットをあてたい。高島屋百選会には同時代の美学・美術史学者、画家、文学者等、多くの“学識者”や“芸術家”が関与している。本稿では、『高島屋百選会百回史』の記述を時系列にとりあげることで、百選会の戦前の活動を改めて整理していく。明治30年代から積極的にすすめられた高島屋の着物新図案創出の活動の推移と、百選会の5名の顧問の参加時期や参加の事由を中心に、戦前期の百選会の歴史を整理することで、今後の研究上の論点を抽出しやすくする。また、顧問の招聘や、百選会活動の活性化に大きな役割を果たしたとされる高島屋社員川勝堅一についても、その略歴と百選会との関わりについて簡略にまとめる。百選会に関わる“学識者”や“芸術家”と川勝との関係を明らかにし、彼らが高島屋の図案創出に果たした役割と成果を考察するための基礎作業としたい。

